

## カンボジア訪問記 その4

～ カンボジア政府統計向上計画（国際協力プロジェクト）～

独立行政法人統計センター  
金室貴子

### 1 カンボジア統計局訪問の背景

総務省統計局、総務省統計研修所及び独立行政法人統計センター（以下「総務省統計局等」という。）は、国際協力機構（JICA）を通じて、カンボジア計画省統計局（National Institute of Statistics (NIS), Ministry of Planning, Cambodia、以下「カンボジア統計局」という。）に対して、2005 年 8 月から 5 年間の予定で「カンボジア政府統計能力向上計画」という技術協力プロジェクトを国際協力の一環として組織的に実施しているところである。詳細については、以下の総務省統計局ウェブサイトで参照可能である。

<http://www.stat.go.jp/info/meetings/cambodia/nittei.htm>

このため、総務省統計局等は、2005 年 8 月以降、年 4 回（1 回の短期派遣につき 2 名の職員を 3 週間程度）JICA 専門家として職員をカンボジア統計局に短期派遣している。筆者は、第 5 回短期派遣（2006 年 7 月 20 日～8 月 4 日）の 1 人としてカンボジア統計局を訪問する機会を得たので、そのときの様子を以下に述べてみたい。ちなみに、このとき筆者は、総務省統計局等から JICA 専門家として開発途上国に派遣される初めての女性職員となった。また、同行者は、これまで毎回派遣されている総務省統計研修所職員（本プロジェクトのチーフアドバイザー）である。



写真 1 カンボジア統計局新館の全景

### 2 カンボジアのイメージと現実

カンボジアといえば、ほとんどの人が思い浮かべるのは、世界遺産であるアンコール・ワットか、明石康氏が特別代表を勤めた国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC、カンボジアの人はウンタックと発音するようだが）といったところであろうか。

カンボジアのガイドブックを読んでみると、「未舗装で悪路が多い」、「蚊に刺されないよう気をつける（マラリアの流行地域のため）」、「停電することが多い」といった良くない内容ばかりである。そのためか、私が「カンボジアへ出張に行く」というと、ほとんどの人から「危ないから気をつけて」という言葉が返ってきた。

しかし実際に行ってみると、少なくとも今回滞在したプノンペン市内は、このようなイメージとは異なっていた。市内の主な道路はきれいに舗装されていたし、心配していた蚊もほとんど見かけなかった。また、筆者の滞在期間中、一度も停電しなかったので市内の電力事情は、かなり改善されているようである。それから、夜には涼しくなるので、公園で食事をする家族をよく見かけた。このように、子連れの家族が、夜間に周囲を警戒することもなく屋外で過ごしている様子を見ると、現在のカンボジアは平和であるとの印象を受ける。

### 3 第5回短期派遣の主な業務

#### (1)人口センサスの集計に関する個別研修の実施

筆者の今回の短期派遣における最も重要な業務は、人口センサスの集計に関する個別研修を行うことであった。このため、カンボジアの2008年人口センサスの集計方法を検討するに当たって参考となるよう「我が国の国勢調査の集計システム」を英語で詳細に説明した。ちなみに、受講者は全て、英語が堪能であったので、英語による研修でも問題はなかった。

この研修では、調査票入力から結果表作成までの集計の基本的な流れのほか、それぞれの集計ステップにおける審査システムについても説明を行うと共に、我が国の統計センターで独自に開発した集計や審査業務に有用な「便利なツール」(VBAプログラム)の使用方法を説明した上で、そのツールを受講者に提供した。



写真2 人口センサスの集計に関する個別研修の様子

#### (2)統計研修の効果測定

本プロジェクトでは、カンボジア統計局の統計能力を向上させることを目的として、総務省統計研修所の本科研修に匹敵するレベル及び規模の統計研修(全48科目)をカンボジア統計局内で実施している。この研修は、講師は全て日本人で、講義は英語であるが、英語・クメール語の通訳(カンボジア統計局職員)を通じて実施されている。また、受講者のレベルに応じて、初級、中級及び上級の3つのレベルに分けられている。

今回の派遣期間中は、統計調査集計システム・集計計画研修(中級)及び統計分析研修(上級)の2つの研修が実施されていたので、筆者は、これらの研修について、効果測定を実施した。具体的には、研修の受講者に対してアンケートを実施し、受講者の意見や評価を収集すると共に、研修用テキストを審査するという方法により、効果測定を実施した。この効果測定の結果、受講生の大半が、研修に満足しており、その内容を実務に生かせると考えていることが判明した。

ただし、上級コースについては、研修内容が難しいという意見も多かった。上級コースなので、研修内容は高度であり、難しいのは当然であるが、上級コースの研修目的と受講者のレベルをうまくマッチさせることが、現実的には難しい側面があることを伺わせた。

### (3) ASEAN人口センサス会議への出席

今回の派遣期間中、ASEAN 人口センサス会議（国連統計部、国連人口基金及びカンボジア統計局共催）が、国連統計部長及びASEAN 各国の政府統計機関の幹部が出席の下、カンボジア国内で開催された。この会議の内容が、本プロジェクトの活動内容に深く関係していたため出席することとなった。議題は、主に以下の2つであった。

国連統計部から 2010 年ラウンド世界人口センサスのための国連勧告の見直し状況の報告

ASEAN 各国から前回の人口センサスの実施状況及び次回に向けての準備状況の報告

会議の席上、カンボジア及びインドネシアから、総務省統計局等の JICA を通じた現在及び過去における両国への支援に対して謝辞が述べられた。また、日本（JICA）側からも、現在の総務省統計局等の国際協力の状況について紹介するなど、積極的に発言を行った。



写真3 ASEAN人口センサス会議の様子

### (4)2008 年人口センサス技術委員会への出席

今回の短期派遣での最も重要な業務の1つとして、第2回人口センサス技術委員会（Census Technical Committee, CTC）への出席があった。この会議は、カンボジア計画大臣主催で、カンボジア統計局、国連人口基金（UNFPA）、日本（JICA）等の人口センサス関係者が出席し、2008 年人口センサスに関する重要事項を決定する権限を持つ大変重要な会議である。

今回は、2008 年人口センサスの集計以降の事務における役割分担や費用負担など、日本側にとっては大変重要な事項を議論することとなっていた。この席上で、日本側は「2008 年人口センサスの集計、分析及び提供について、日本側が経費を負担し、主要な役割を担う用意がある」ことを明言した。

この会議を通じて、国際会議で存在感を示すためには、我々が可能な役割分担及び費用負担について、早い段階から明言することの大切さを感じた。特に、2008 年人口センサスのように、複数の支援国又は機関（ドナー）と共同で実施されるプロジェクトの場合、「どのドナーが、どの業務を担当し、その費用を負担するのか」が大きな論点になる。「その業務の費用を負担するドナーが、その業務の主導権を握る」という構図があるように感じられた。したがって、費用負担について早い段階から明言できなければ、その業務の主導権を握ることは難しいということになる。

この点、日本政府の場合には、周知のとおり、毎年度、おおむね年度末になって、やっと次年度の予算が確定することから、例えば、2008 年度の費用負担について、2006 年度に明言することは、関係各署の協力ができないということになる。この問題が、国際会議において、日本が存在感を示しにくい原因の1つとなっている。

しかしながら、本プロジェクトの場合には、在カンボジア日本大使館や JICA カンボジア事務所の理解と協力により、上述のとおり、この会議の席上で明言することができた。このように、本プロジェクトは、現在、非常に恵まれた実施環境にあり、このことに対して関係各署に厚く感謝しなければならない。

#### (5) 2008 年人口センサス調査票案に対する助言

2008 年人口センサス調査票案に対して、「従業地・通学地に関する調査事項」の追加を提案し採用された。これは、この調査事項に含まれる「自宅で従業」の質問が、開発途上国の発展の度合いを示す 1 つの指標である「自宅就業率」の算出を可能にすることや、結果表の案を示した上で、プノンペンのような大都市では、夜間人口のみならず昼間人口も把握する必要がある、という日本（JICA）側からの説明が理解されて、受け入れられたものである。

#### (6) 2008 年人口センサス調査区設定作業に対する支援

現在、カンボジア統計局では、2008 年 3 月の本調査に向けて、日本（JICA）側の指導の下、調査区設定作業が進められている。カンボジアには、調査区地図の原図に適した縮尺地図がないため、JICA が提供した衛星写真（縮尺 1/5,000 ~ 1/20,000）を調査区地図の原図として利用するという、おそらく世界初の画期的な方法を採用している。

### 4 統計センターの建設

この短期派遣の終盤に、嬉しいニュースが飛び込んできた。本プロジェクトがかねてから申請していた統計センター建設（カンボジア統計局構内）への支援を日本政府が最終決定したのである。この統計センターは、2008 年人口センサスの集計を主目的としており、6 階建とする計画である。その内容は、1 階が駐車場、2 階が図書館及び刊行物販売所、3 階が集計室、4 階が事務室、5 階が研修室、6 階が会議用スペースとなっており、エレベーターも設置される予定である。

ちなみに、前回の 1998 年人口センサスの集計を実施した建物は、建築後 40 年以上が経過しており、老朽化が著しく、雨漏りや白蟻の被害が出ているため、日本人を常駐させるには、安全や健康面から、大きな問題があるといわざるを得ない状況である。

このような状況の下、この統計センター建設は、本プロジェクトの実施と併せて、統計能力向上などの技術的な側面の改善や、集計用機材の充実、事務スペースの拡充などの物理的な側面の改善にとどまらず、集計に携わる多くの職員の心理的及び健康的な側面にも、大変良い影響を与えるものとする。

この統計センターが完成すれば、技術協力による人口センサスの統計表などと共に、総務省統計局等による国際協力の成果が、より明確な形で長期的に残されることになるので、これを機会に政府開発援助（ODA）に対する国民の理解が高まれば幸いである。

### 5 プロジェクトの今後

本プロジェクトは、冒頭で述べたとおり 5 年間のプロジェクトであるが、統計研修が中心のフェーズ 1（2005 年 8 月～2007 年 3 月予定）と、2008 年人口センサス支援が中心のフェーズ 2（2007 年 4 月～2010 年 8 月予定）に分けられている。

これに基づいて、今後は、まず、フェーズ 1 の終了時評価を実施することになっている。また同時に、フェーズ 2 の開始に向けて、2008 年人口センサスで使用する集計用機材や集計用ソフトウェアの構成についても詳細な検討を行う予定である。

このように、これからは、我が国の統計センターが持つ集計に関する独自のノウハウを最も生かせる時期ということになる。そのため、我が国の統計センター職員が、本プロジェクトの中で果たすべき役割は、より一層重要になり、また、関係各署から重要な役割を果たすことを期待されているのである。